

回転するろくろに取り付けた細い円柱形の木に、シャカと呼ばれる刃物を押し当てると、細かな木くずを飛び散らせながら、みるみるボールペンのペン先部分の形へと変わっていく。大阪市生野区にある「平井木工挽物所」の平井守さんがつくっているのは、木製のボールペン。ろくろを使う挽物というところ、お椀などをつくる様子を見たことがあるかもしれないが、「現代の名工」にも選ばれた平井さんが手がけるのは、木製のボールペンや万年筆といった筆記用具だ。

使用する材料は、黒檀、紫檀、屋久杉など貴重な銘木。これを長さ約30cm、直径2cmの丸棒に切り分け、その1本の丸棒からキャップ、首軸(ペン先から持ち手あたり)、胴体からなる1本のペンをつくりだす。できあがったボールペンや万年筆は、温かみのある素朴な味わいの木目の1本もあれば、水彩で描いたような芸術的な木目の1本もある。「木目の模様は1本ごとに違うでしょう?ひとつとして同じ模様の物はないんです」と平井さん。平井さんは、まっすぐ伸びた木だけでなく、木の「こぶ」も使うという。こぶとは、木の根っこや幹に変異的にできた玉状の部分のこと。「こぶは、木目がまっすぐではなく、あちこちに向いているので削るのも難しいのですが、実に多様な模様が表出します」

平井さんが挽物の世界に飛び込んだのは、15歳のとき。木工挽物所の職人だった親戚を頼って、徳島県から大阪市生野区へ。「親戚の“おやっさん”のもとで修行して、洋傘の持ち手や先端部など、傘の木製パーツを下請けとしてつくっていました」。当時の生野区は、隣の東大阪市にある大手メーカーの下請けを担う準工業地帯。1階が工房、2階が住居という小さな町工場がずらりと並び、「洋傘にしても、傘の骨をつくる

# 木のぬくもりが感じられる、ひとつとして同じ物がない木製筆記具



シャカの刃先を木材に当てて、ろくろを回すと、みるみるペン先の形に姿を変えていく。ペン先がある程度仕上がったら、平井さんはろくろの回転を止めてキャップをはめ合わせ、またシャカで削ってという作業を、カチッと合まる太さになるまで、繰り返す。シャカには大きく分けて、刃先の形がやや丸い粗削り用と四角い仕上げ用があり、作品によっていくつものシャカを使い分けて削る。



## 筆記用具挽物師 平井守さん



1947年、徳島県生まれ。「なにかの名工」に続き、昨年「現代の名工」に「オリジナルのペンを使ってくれた人が「見てよし、触ってよし、書いてよし」と言ってくれ、喜んでくれるんですよ、うれしいですね。各地の百貨店の催事や各種イベントのほか、サンフランシスコのペニンシュラなどにも出展。地元中学校でも、つくりの魅力を伝える職業講話も行う。

写真左/直径3mmほどの小さなペン先の中心に、ドリルで穴を開ける。「ほんの少したりとも中心からずれてはいけない難しい作業です」。ただし、平井さんはあたたかみのある作業であるかのように、迷わずに中心を見極め、穴をあけていく。写真中央・右/穴を開けた後、美しいペン先の形になるようにシャカで削っていく。

写真上/30cmほどの1本の円柱形の木を、キャップ、首軸、胴体の3つのパーツに切り分け、1本のボールペンをつくりだす。

写真下/平井さん自らがつくったさまざまな種類のシャカ。

ペン先まで木でできたボールペンは、「平井木工挽物所」だけのオリジナル。手にした時、優しい木のぬくもりが感じられる。

写真左/鹿の角を材料とした万年筆。鹿の角は木に比べて重いため、少ない筆圧でラクに書くことができると評判。写真右/素朴な木目の美しさが楽しめるボールペンのほかに、木のこぶを使うことで、木でありながら大理石のような風合いを醸し出した万年筆などバリエーション豊富。同じこぶを使った物でも表情は1本ごとに違う。

**平井木工挽物所**  
大阪市生野区巽北3-1-24  
TEL 06-6752-3875

町工場、布を張る町工場などが揃い、この近辺だけでフランスの有名なブランド傘が仕上がっていたんですよ」。23歳のとき、師匠の急逝により独立。「教えてくれる人がいなくなったから、自分で考えてやらないうちがよい。そりゃ苦労しましたわ」

挽物職人は、木を削る重要な道具であるシャカも、自ら鉄を熱して叩いて自分でつくる。鍛冶屋としての腕も必要とされるのだ。「シャカがつかれないと、一人前じゃない。修行時代につくり方はおやっさんから習ったけど、さらにシャカの刃先の形を改良したり、材料をより硬いハイス鋼という素材に替えるなど、自分流の工夫を加えてきました」

ところが、バブル期が過ぎたころから、洋傘関連の仕事は、生野区の町工場から中国の大工場へと奪われてしまふ。平井さんは、木製の編針やモップの持ち手など小ロットのさまざまな木製パーツの仕事をこなす一方で、「あらたに、平井木工挽物所ならではのオリジナル商品をつくらう」と考えた。元来、木を細く長く加工するのが得意だ。目をつけたのが、木製の筆記用具だった。木製のボールペンと万年筆をつくり、ある得意先に持っていき、「これはすごい!と驚いてもらえてね。とてもうれしかった。そのとき、初めて職人としての喜びを感じたんですよ」。「下請け時代は、指定された木材で指定された木製パーツをつくるだけの毎日で、どこかでストレスを感じていたんやね」

### 自分の思いを形にできるのが楽しい!

平井木工挽物所のオリジナルボールペンの唯一無二の特徴が、ペン先まで木でできていること。木製ボールペンを製作している工房は他もあるが、それらのペン先はすべて金具。「金具を使えば、すごく簡単につくれるんです。ペン先まで木というのが、うちのウリです」

しかも、ただペン先まで木製で形にすればよいだけではない。ボールペンの本体も、キャップをはめるとき、カチッと本体と合わない、と話にならない。「この太さを合わせるが大変なんです。1000分の3mm単位ともいわれる精度で首軸をシャカで削って、キャップがカチッと合まる太さに調整する。「1000分の数mm単位といっても、計ったりしませんよ。シャカで削って、そのあと専用のペーパーで磨くんです。これでちょうどいいぞ」という加減は、カンです。ろくろは、ペダルを足で踏んで回転させるしくみ。「ぐっと踏んで回転速度を速くしたり、あえて足を離して速度を落としたりします。繊細な箇所は、足を離して惰力で回っているときに削るときれいに仕上げられます」

作業中の平井さんは楽しそうに姿が印象的だ。「自分のところのオリジナルですから、好きなようにできるでしょ。作業しているうちに、「あ、こうしてみよう」って思いつくんです。それを形にしてみる。たとえば、キャップの先を丸く削ったり、円柱形にしたり。胸ポケットにさせるようフック付にしてみたり。木材の代わりに鹿の角を使うこともありますよ。同じ物ばかりつくるのではなく、自分の思いをオンリーワンの1本にできるのがいちばん楽しいですね」

「うちの筆記用具は、ひとつとして同じ物がないから選んでいただくのも大変(笑)。先日、この工場までペンを買いに来られた方も、これもいいなあ、あれもいいなあ、と一つひとつ手に取って、まあずいぶん長い時間をかけて選んでくれました(笑)」

平井さんが培ってきた挽物職人としての技は、いま、長男の丈也さんにも引き継がれている。「早く僕を追い越してほしいね」の言葉に続いて、「まあ、まだムリやと思うけど」とニヤリ。わが腕への自信と、息子への期待と愛情が込められた笑顔だった。